千葉大学大学院人文公共学府　研究プロジェクト報告書　第 388 集　pp.5-27　2025 年
『環境変動下における人間－家畜関係』

ヒツジとヤギの異常に対するモンゴル牧畜民の民間治療
－中国甘粛省粛北モンゴル族自治県の事例から－

スルナ

１.はじめに

本稿の目的はヒツジとヤギ[1]の異常とその原因、民間治療を詳述することである。ここでいう異常とは、家畜の外見や行動から読み取れる普段と異なる状態を指す。民間治療とはモンゴル牧畜民による家畜に対する経験的な治療のことで、粛北県のモンゴル人は、この民間治療をモンゴル語でハル・エムネレゲ（*χar emnelge*）と呼ぶ。ハルとは黒、エムネレゲとは医療、治療の意である。

家畜の健康管理や民間治療に関する知識は、様々な地域の牧畜民が有している。たとえば、チベット牧畜民（星ほか 2020）、ネパール（Heffernan 1997）、トルコ系遊牧民ユルック（松原 2004）、ケニアの牧畜民トゥルカナ（太田 1991）などがある。モンゴル牧畜民では、中国内モンゴル自治区オルドス地域の事例が報告されており（楊 2002）、モンゴルの伝統的な獣医学は、人と家畜を同等に認識していることを明らかにしている。

本稿で事例として取り上げるのは、粛北モンゴル族自治県（以下、粛北県）である。本稿では、粛北県南山地区のヒツジとヤギに生じる異常とその原因と牧畜民による民間治療を詳述する。

2.調査地概要

2.1 粛北モンゴル族自治県

調査地の粛北県は、中国甘粛省の北西部に位置する（図 1）。東は内モンゴル自治区のエゼネ旗、南は瓜州県、玉門市、西は新疆ウイグル自治区の哈密市、北はモンゴル国のゴビ・アルタイ県に隣接する。

粛北県は、主に南山地区と北山地区の２つに分けられている（図 1）。本稿では、同県内の南山地区に焦点を当てる。南山地区は、河西回廊の西南側、祁連山脈の北西部に位置している。北緯 38°00′～39° 53′、東経 94°39′～98°50′。面積は 35,118 ㎢である。標高は 2000m～5000m で、標高は東南部が最も高く、最高峰は標高 5808m に達している。南東から北西にかけて標高が低くなり、北西部では 2000m 程度である。年平均気温は 6.３℃ である。最寒月は 1 月で最低温度は-25.1℃、最暖月は 8 月で最高温度は 33.9℃に達する。年間降水量は 86～280mm で、年間降水量の 60～69％は夏に降る。平均の無霜期は 156 日で、年平均蒸発量は 2,493mm である。

調査地において、春、夏、秋と冬の四季がある。春は 3 月から 5 月、夏は 6 月から 8 月、

[1] 大型家畜はウシ、ヤク、ウマ、ラクダである。日帰り放牧せず放し飼いのため、異常を発見するまでに時間差が生じる。

秋は 9 月から 11 月、冬は 12 月から 2 月である。

粛北県に暮らしているモンゴル人はオイラト・モンゴル[2]に属するホシュート・モンゴル人である。オイラト・モンゴル人は、中国においてモンゴル民族の一下位集団として、新疆ウイグル自治区、内モンゴル西部、青海省、甘粛省に居住している。オイラト・モンゴル集団は大きく 4 つに分けられ、オイラト、トルグート、ホシュート、ドルベトの 4 つである（バヤリタ 2018:51）。

同県で 1999 年と 2010 年に、それぞれ 2 回に牧畜民を町に移住させる定住プロジェクトが行われた（宝魯尔 2014）。そのため、現在ではほとんどの牧畜民が町と牧畜地域にそれぞれに住居を持っている。牧地地域にある住居が町から比較的に近い牧畜民は牧地と町の間で往復頻度が高い。牧畜地域の住居が町から離れている牧畜民は通常牧地に居住することが多い。牧畜作業が忙しくない時期にのみ町の住居に住む場合もある。

粛北県の行政組織は２つの鎮、馬鬃山[3]、党城湾と 2 つの郷、塩池湾、石包城から構成されている。馬鬃山鎮は北山地区にあり、それ以外の行政組織はすべて南山地区に属する（図 2）。党城湾鎮には粛北県の人民政府がある。同県の総人口は 1.26 万人（2022 年[4]）である。モンゴル人は県人口の 4 割弱を占めるおよそ 5000 人である。主な生業は牧畜である。牧畜の対象となっている家畜は、ヒツジとヤギ、ウマ、ヤク、ウシ、ラクダである。本稿で取り上げるヒツジとヤギは、モンゴル語でボグ・マル（*bog mal*）もしくはナリン・マル（*nærin mal*）と呼ばれる。ナリン（*nærin*）は細い、精細の意である。

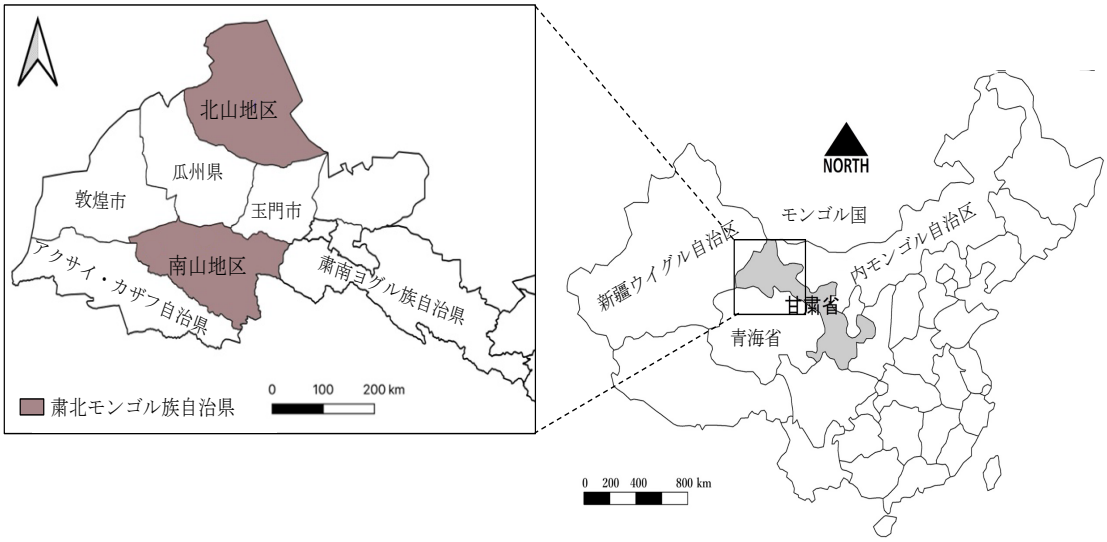


図１　粛北モンゴル族自治県位置図（筆者作成）

[2] 現在、オイラト人は、トルキスタン、チベット高原、モンゴル高原、中央アジア、東ヨーロッパに分布している（シンジルト 2021：5）。
[3] 馬宗山と書かれることもある。
[4] 粛北モンゴル族自治県地方史誌辦公室 2023：1

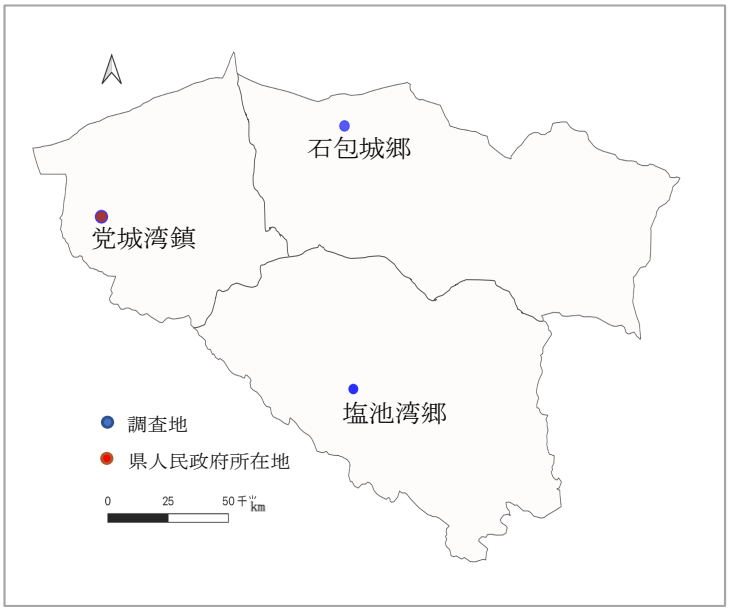


図 2　粛北県南山地区の位置（筆者作成）

3.現地調査

3.1 調査期間・調査方法

調査期間は 2019 年 8 月 28 日～9 月 3 日、2021 年 2 月 10 日～2 月 20 日、および 3 月 15 日～3 月 27 日の 3 回、計 30 日間である。

調査方法はフィールド調査による聞き取り調査と参与観察である。まず、インフォーマントの住む党城湾鎮の住居を訪れ、聞き取り調査を行なった。その後、塩池湾郷と石包城郷にある牧地で参与観察をした。

調査における言語はモンゴル語と漢語である。

本稿で使用するモンゴル語はローマ字表記とカタカナ表記を併用した[5]。

写真はとくに言及がない限り全て筆者が撮影したものである。

3.2 インフォーマント

インフォーマントは合計 4 名である（表 1）。そのうち、県獣医局から退職した獣医師 1 名、県獣医局の獣医関係者 1 名、牧畜民 2 名である。獣医師および獣医関係者の 2 人は牧畜民の家庭に生まれ育ったため、本稿では彼らの対応も含める。

[5] モンゴル語のローマ字表記はバヤリタ・ブリガ（2009）の「オイラトモンゴル語の世界」『日本語の隣人たち』をもとに、現地の発音に近い表記を採用した。

表 1　インフォーマント一覧

居住地	名前	性別	年齢	生業	民族
南山地区	A 氏	男性	60 代	元牧畜民、獣医師（退職）	モンゴル
	B 氏	女性	60 代	牧畜民	モンゴル
	C 氏	男性	50 代	獣医局の獣医関係者	モンゴル
	D 氏	男性	30 代	牧畜民	モンゴル

表 2 インフォーマントの所有家畜（2021 年）

	合計	ヒツジ	ヤギ	ウマ	ヤク	ラクダ
A 氏	10	0	0	10	0	0
B 氏	250	77	123	50	0	0
C 氏	0	—	—	—	—	—
D 氏	608	200	0	48	300	60

A 氏（60 代、男性）

A 氏は県人民政府の所在地がある町、党城湾鎮に住んでいる。A 氏は粛北県出身で、牧畜民の家庭に生まれた。20 歳の頃に甘粛省の甘南チベット族自治州[6]にある甘南牧畜学校[7]に入学し、獣医学を学んだ。卒業後、粛北県獣医センターに 37 年間勤務し、2019 年に退職した。退職後も牧畜民からの依頼をされれば、家畜の治療やヒツジ、ヤギ、ウマの去勢を行なっている。

所有している家畜は 10 頭のウマであり（表 2）、A 氏の妹の牧地で飼育されている。

B 氏（60 代、女性）

B 氏は牧畜を営む牧畜民である。県人民政府の所在地がある町の党城湾鎮にも住居を持つ。牧地は南山地区の石包城郷にある。宿営地を 4 つ持ち、季節放牧している。

所有している家畜はヤギ 123 頭、ヒツジ 77 頭、ウマ 50 頭程度である（表 2）。B 氏によると、以前はヒツジとヤギ 500 頭ほど、ウマ 60 頭ほど飼っていた。しかし、現在は夫婦 2 人が高齢で、子供もそばにいないこともあり、家畜の一部を売却して現在の頭数になったという。

C 氏（50 代、男性）

C 氏は粛北県の塩池湾郷出身で、牧畜民の家庭に生まれた。現在は粛北県獣医局に勤務している。妻（50 代）、娘夫婦（30 代）と孫娘の家族 5 人で暮らしており、全員県人民政府の

[6] 中国の 10 のチベット族自治州の 1 つである。チベット高原の北東部、甘粛省の南西部に位置する。チベットの伝統的な地理区分ではアムド地方の東部に相当する。
[7] 中国語で甘南畜牧学校。

所在地である党城湾鎮に住んでいる。甘粛省甘南チベット族自治州にある甘南牧畜学校を卒業後、粛北県獣医局に就職し、1995 年に獣医助手の資格を取得した。

調査時には、家畜を所有していなかった。

D 氏（30 代、男性）

D 氏は大学卒業後、両親に手伝うために地元に戻り牧畜に従事している。彼の同居家族は父親（50 代）と母親（50 代）である。県人民政府の所在地がある町の党城湾鎮にも住居を持つ。牧地は南山地区の塩池湾郷である。宿営地を 4 つ持ち、季節放牧をしている。

家族の所有家畜数はヒツジ 200 頭、ウマ 48 頭、ラクダ 60 頭、ヤク 300 頭である（表 2）。

4.粛北県におけるヒツジとヤギの管理

4.1 健康把握

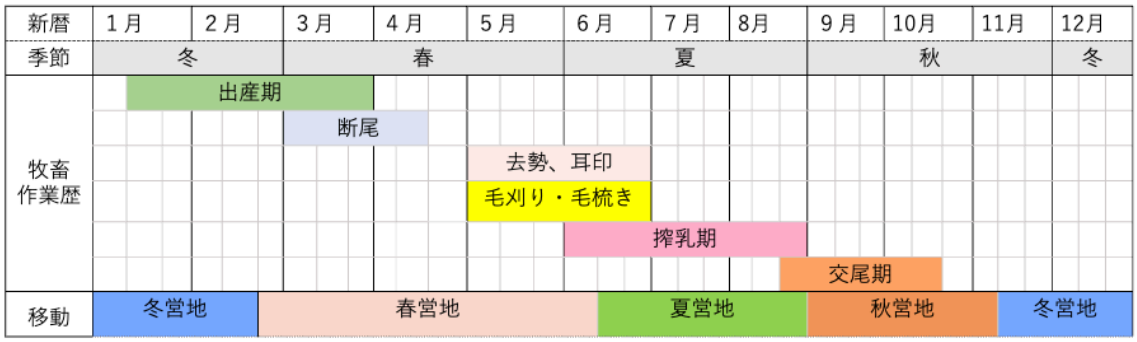
ヒツジとヤギの放牧方法は混牧による日帰り放牧で、朝放牧に出されて、夕方宿営地に戻る。放牧に際し、牧夫 1 人が見守る必要がある。牧夫は朝放牧に出す際、放牧中、畜舎に戻る際にヒツジとヤギの様子を確認する。

4.2 牧畜作業歴

毎日の放牧にくわえて、牧畜作業を行う際にも異常の有無を確認する。

牧畜作業はまず春に出産期がある（図 2）。次に 3 月から 4 月中旬ごろにかけてヒツジの断尾作業がある。5 月頃から約 1 か月間はヤギの毛梳き作業が続き、6 月頃からはヒツジの毛刈りがある。同じ時期に、オス仔畜の去勢作業と、仔畜の耳印を行う。それらの作業が終了すると夏営地へ移動する。6 月から乳搾りが始まり、地域内での温度差により 7 月から 9 月までつづく。8 月下旬から 9 月初旬にかけて秋営地に移動する。10 月中旬までは交尾期となる。その後、11 月ごろに冬営地へ移動する。冬営地と春営地は同じ場所、または近接した場所にある場合が多く、一年中最も長い期間滞在する場所となる。

図 2　ヒツジ・ヤギの牧畜作業歴



5. ヒツジとヤギの異常と民間治療

病気を粛北県のモンゴル人はオブチン（*öbtʃin*）と呼んでいる。オブチン（*öbtʃin*）という語彙は人間と家畜どちらに対しても用いられる。異常と対応である民間治療の呼び方が付けされているものとそうでないものがある。呼び方が付けされている例については、以下の事例で説明する。

現地調査において、4 人のインフォーマントに、「家畜の病気とはどんなものがあるか」、「家畜に普段と異なる異常がどのようなものがあるか、それにどのように対応するか」「対応が必要な症状が何か」、「家畜の健康のために取っている行動は何か」、「傷ついた場合、どうしているか」などを質問し、ヒツジとヤギの異常に関する事例を収集した。事例は合計 38 例で、その内訳はヒツジ 19 例と、ヤギ 19 例、異常は両方に共通している。そのうち、異常の症状は同じであるが対応に違いがみられる事例は 11）の 1 例である。症状と対応は同じだが病名が異なる事例は 19）の 1 例である。

以下、まず出産期、次に、去勢、毛刈り、毛梳き作業にかかわる異常を取り上げる。次いで、年中に発生する異常、最後に感染症について述べる（表 3）。

表 3 は対象、症状（病名）、部位、原因、対応（対応法の呼び方）についてまとめたものである。表 4 は対応に使われる材料とその入手方法についてまとめたものである。なお、事例には病名と対応の呼び方が付けされているものとそうでないものがある。あるのみを表示している。

表 3 ヒツジとヤギの異常とその対応

有○　無－　明確でない△

No.	対象	症状（病名がある場合）	部位	原因	対応（呼び方がある場合）
1）	母畜	腫れ、発疹、小さな白色あるいは透明の隆起が現れる	乳房	不明	花椒を煮た水で洗う、ガソリンを塗布する
2）	母畜	胎盤が出ない、胎児を産み落とされない、母畜が死んでしまう	－	栄養不足、活力がなくなり、動かないため	アルツの葉を煎じて、その汁を飲ませる、手で取り出す
3）	新生児仔畜	フンが液状またはそれに近い状態、通常より軟らかい状態（下痢・チチホ *tʃitʃx*）	－	初乳を消化できない、畜舎の衛生状態が悪い、寒さ	布で服を着せる、家の中に入れて暖を取らせる
4）	仔畜	体温低下、体が震える動け	全身	早産でエネ	しばらく砂に埋もれて

		なくなる（ウィーダホ *yidaχ*）		ルギーが不足、雪、寒さ	いたら、体温が回復する、フェルト製の袋に入れて暖を取る
5）	ヒツジ ヤギ 仔畜	耳や足が硬くなり凍りつき、歩けなくなる（凍傷・コルホ *kɔrx*）	耳 足	寒さ 凍傷	ノルムを全身に散布し、フェルトで包み、背中をかまどに向けて暖をとらせる。足を冷たい水に浸しながら手で優しくマッサージする。翌日に生じる腫れや水疱を細い針で刺すか、手で押しつぶして水を出す
6）	仔畜	体力が落ちる、 元気がなくなる	全身	去勢後傷口の治りが遅い	仔畜の睾丸を煮て、そのスープを飲ませる
7）	ヒツジ ヤギ	開いた傷口	腹部 背中 皮膚	毛梳き 毛刈り	天然塩を水に溶かして傷口を洗う。傷口にヨードフォアを塗る
8）	ヒツジ ヤギ	食欲が失って痩せる、体力低下	毛 皮膚 耳 尻尾	ダニ	薬浴、牧地の土にはアルカリ性があったので、ヤギとヒツジを湖に追って洗う
9）	ヒツジ ヤギ	咳をする、鼻水が出る（風邪・ハニヤド *χanæːd*）	△	他の群れと一緒に放牧した場合	アルツの葉を煎じて、その汁を飲ませる
10）	ヒツジ ヤギ	腹部が膨らみ、草を食べなくなる	腹部	消化不良	ソーダと酢を混ぜて飲ませる
11）	ヒツジ ヤギ	声をあげて、落ち着かず、排尿姿勢をとっても排尿できない	△	不明	口をつかんで息を止めさせる。ヒツジの場合、つかむ前に天然塩を口に入れる。ヤギの場合、口をつかんで息を止めさせ後に、牧畜民が自身の歯で何度か噛む

12）	ヒツジヤギ	骨が折れた状態	足	放牧地での転倒、ヤギが山に登るため	折れた骨をマッサージし元の位置に整復し、小さな木や板で固定する。花椒を煮込んだ水に浸した布で骨折した足を巻いて包み、それをひもでしっかり巻いて締める
13）	ヒツジヤギ	餌を食べず、水も飲まず、同じ場所でぐるぐる回る（エリグゥー・オブチン *ergy: öwtʃin*）	頭部	犬のフンを食べたため	小さな丸くて白い石を持って、家のかまどの上で加熱し、熱した石を後頭部に押し当てる
14）	ヒツジヤギ	まつげが眼球に当たり、目ヤニが増え、涙が止まらない、目が赤くなる	目	まつげが逆さに伸びることで、まつげが眼球に当たる	天然塩を水に溶かして洗う。花椒を煮た水で洗う。目の下まぶたを軽く下に引っ張り、細い針と糸で下まぶたの皮膚と縫い留める。その後、塩水と花椒を煮た水で洗う
15）	ヒツジヤギ	口腔の中や口唇に赤い斑点、水泡が見られる。乳頭に発疹し、水泡が出る（アムルン *amrʊn*）	口腔 口唇 乳頭	不明	花椒を煎じ、その汁が冷めた後患部を洗う。布で患部を血が出るまで強く摩擦した後、天然塩を水に溶かして患部を洗う
16）	ヒツジヤギ	呼吸困難	△	草の食べすぎ	—
17）	ヒツジヤギ	フンが乾燥し、歩けなくなる	△	ビニール袋の誤飲	—
18）	ヒツジヤギ	口、鼻、蹄、乳房に水泡が生じる、口から泡沫状のよだれが垂れる。発熱、餌を食べなくなる（口蹄疫、シュリケェ *ʃylkæ*、アム・トゥルゥギン・オブチン *am tʊrʊ:gin öbtʃin*）	口 鼻 蹄 乳房	不明	隔離、死んだら土に埋めるか焼却

19)	ヒツジヤギ	毛が抜け落ち、全身の皮膚に赤い斑点、水疱が生じる。水疱が破れて傷口ができる、発熱、餌を食べなくなる（ホネェン・ツォホゥル *χönen tsɔχʊr*、ゴォドロン *gɔdrʊn*）	全身皮膚	不明	隔離、死んだら土に埋めるか焼却

表 4 ヤギとヒツジの異常対応に使われる材料と入手

材料	入手			
	購入	家のもの	採取	家畜
花椒	○	○	－	－
ガソリン	○	○	－	－
布	－	○	－	－
砂	－	－	○	－
フェルト製の袋	－	○	－	－
かまど	－	○	－	－
ノルム	－	○	－	－
冷たい水	－	○	○	－
仔畜の睾丸	－	－	－	○
天然塩	○	○	－	－
ヨードフォア	○	－	－	－
アルカリ性の土	－	－	○	－
アルツ	○	○	○	－
ソーダ	○	○	－	－
酢	○	○	－	－
枝・木板	－	－	○	－
石	－	－	○	－
針と糸	○	○	－	－

5.1 出産期の異常

冬から春にかけての出産期に発生する異常は 5 例である（表 5）。

表 5 出産期の異常

No.	対象	症状（病名がある場合）	部位	原因	対応（呼び方がある場合）

1)	母畜	腫れ、発疹、小さな白色あるいは透明の隆起が現れる	乳房	不明	花椒を煮た水で洗う、ガソリンを塗布する
2)	母畜	胎盤が出ない、胎児を産み落とされない、母畜が死んでしまう	ー	栄養不足、活力がなくなり、あまり動かないため、難産や死産、流産	アルツの葉を煎じて、その汁を飲ませる、手で取り出す
3)	新生児仔畜	フンが液状またはそれに近い状態、通常より軟らかい状態（下痢・チチホ *tʃitʃx* ）	ー	初乳を消化できない、畜舎の衛生状態が悪い、寒さ	服を着せる、家の中に入れて暖を取る
4)	仔畜	体温低下、体が震える動けなくなる（ウィーダホ *yidaχ*）	全身	早産でエネルギーが不足、雪、寒さ	しばらく砂に埋もれていたら、体温が回復する、フェルト製の袋に入れて暖を取る
5)	ヒツジヤギ仔畜	耳や足が硬くなり凍りつき、歩けなくなる（凍傷・コルホ *kɔrx*）	耳足	寒さ、凍傷	ノルムを全身に散布し、フェルトで包み、背中をかまどに向けて暖をとらせる。足を冷たい水に浸しながら手で優しくマッサージする。翌日に生じる腫れや水疱を細い針で刺すか、手で押しつぶして水を出す

1）乳房の腫れ・発疹、小さな白色あるいは透明の隆起が現れる

母畜の乳房に腫れや発疹、小さな白色あるいは透明の隆起が現れることがある。これらは一般的には、出産時期や搾乳する際に見られる。目視や手で乳房の形や乳の出を確認することが多く、発見されやすい。

乳房の腫れや発疹の原因は明確ではない。

対応としては、花椒を煮た水で乳房を洗うか、あるいはガソリンを塗布すると効果的であると言われている。花椒とガソリンは購入する。

花椒をヤルム（*jarɔm*）と呼ばれている（写真 1)。花椒とはミカン科の植物で、学名は

Zanthoxylum bungeanum Maxim. [8]、和名はカシュウ[9]である。調味料を販売する店あるいは野菜屋から購入することができる。

写真 1 乾燥させた花椒（2021 年 3 月）

2）胎盤が出ない、胎児を産み落とせず、母畜が死んでしまう

乳房が大きくなり、食欲が落ち、母畜が立ったり伏せたり、落ち着かず歩き回ることは出産の兆候である。しかし、個体によって胎児が産み落とせず、あるいは胎盤が出ないためで、難産や死産、流産する場合がある。これにより母畜が死んでしまう可能性がある。

原因は、妊娠中に食欲がなくなり栄養不足で痩せてくる、活力がなくなり、あまり動かないことを疑う。

対応はアルツ[10]の葉を煎じて飲ませると、胎盤が下りてくる。アルツとはノキ科の植物で、学名は *Juniperus arenaria*（Wils.）Florin、和名は沙地柏である（バヤリタ 2018：132）。産み落とさない胎児や胎盤を手で取り出すこともできるがアルツを煎じて飲ませる方が母畜にとって痛みが少ないと考えられている。

3）フンが液状またはそれに近い状態、通常より軟らかい状態

仔畜のフンが液状、またはそれに近い状態、あるいは通常より軟らかい状態になることがある（写真 2）。モンゴル語でチチホ（*tʃitʃx*）といい、下痢をするという意味である。この表現は人間にも用いられる。

新生児が非常に弱っている場合に初乳を与えると下痢を起こしやすい。初乳は濃くて、栄養が高いため、弱い新生児が消化できないためである。ほかに畜舎の衛生状態が悪い場合や

---

[8] 冨山大学・民族薬物データベース https://ethmed.toyama-wakan.net/Search/View/11302（最終閲覧日 2025 年 2 月 25 日）

[9] GKZ 植物事典 https://gkzplant.sakura.ne.jp/mokuhon/syousai/kagyou/ka/kashou.html（最終閲覧日 2025 年 2 月 25 日）

[10] 新疆のイリ・カザフ自治州のオイラトモンゴル人はアルツをうがいなど薬用として利用する以外に、線香用、儀礼用としても利用している。アルツァの葉、小枝を採取し、それを火の上に乗せて燻すと、芳香のある煙を出す。その煙には身を清め、厄を払う効果があると信じられている（バヤリタ 2018:86-88）。

寒さも、仔畜の下痢の原因となる。

対応としては、家にある布を用いて服を作り、着せる（写真 3）。とても寒い日には、下痢をする新生児と仔畜を家の中に入れて暖を取る。

写真 2（左、右）　下痢をしている仔ヒツジ（2024 年 6 月）

写真 3　保温のため服を着ている子ヒツジ（2021 年 3 月）

4）体温低下、体が震える動けなくなる

新生児の体温が低下し、震え、動けなくなる。現地ではウィーダホ（*yidaχ*）という。

仔畜が早産の場合に起こりやすい。雪や寒さも体温低下の原因になる。

対応は、首以外の体の部分をしばらく砂に埋めておくと、体温が回復するという。あるいは、濡れた身体をタオルで拭いて乾かし、フェルト製の袋に子ヤギ・子ヒツジを入れて暖を取る。フェルト製の袋をトゥンゲルツッグ（*tyngertseg*）あるいはホルガナウート（*χurganaʊːt*）という。

5）耳や足が硬くなり凍りつき、歩けなくなる：凍傷

ヒツジとヤギの耳や足が硬くなり凍りつくと、歩けなくなる。モンゴル語でコルホ（*kɔrx*）と言い、凍傷の意である。人間に対しても用いられる。凍傷になると、耳の先端や足の肢端が壊死して脱落することがある（写真 4）。

対応として、凍傷した家畜を家に入れ、かまどからウニス（*ynes*）のノルム（*nɔrʊm*）を

全身に散布する。ウニスはモンゴル語で灰、ノルムは熱い灰の意味である。その後、フェルトで包み、背中をかまどに向けて暖をとらせる。また、足が凍りついた場合は、家に入れた後、冷たい水に浸しながら手で優しくマッサージする。この方法により、足が徐々に柔らかくなり、足の骨の凍結や脱落しない。翌日になると、足に腫れや水疱が生じる。それを家で使う細い針で刺すか、手で押しつぶして水を出す。そうすると回復する。

写真 4　凍傷で右後肢の肢端が脱落した仔ヒツジ（2021 年 3 月）

5.2 去勢作業に関わる事例

ヒツジとヤギの去勢作業にかかわる異常は 1 例である（表 6）。

表 6 去勢作業に関わる事例

No.	対象	症状（病名がある場合）	部位	原因	対応（呼び方がある場合）
6）	仔畜	体力が落ちる、元気がなくなる	全身	去勢後傷口の治りが遅い	仔畜の睾丸を煮て、そのスープを飲ませる

6）去勢後の体調不良、体力が落ちる、元気がなくなる

去勢後の傷口に注意する（写真 5）。作業後仔畜を立たせて放す。その際すぐに移動しはじめるが、地面に伏せたまま起き上がらないことがある（写真 6）。傷口の治りが遅い場合、仔畜の体力が落ちて、元気がなくなることでわかる。

地面に伏せる原因として、傷口の痛みによって元気がなくなることは考えられる。時々立たせて歩かせる必要がある。常に伏せたままだと傷口の回復に良くないと言う。

また、去勢後の仔畜の体調が悪いようであれば、去勢の時に取り出した睾丸、（写真 7）を煮て、そのスープを飲ませると効果があるという。去勢の時に取り出したヒツジとヤギの睾丸を現地ではモンゴル語でイム（*im*）という。

写真 5（左）去勢後の仔ヒツジ（2024 年 6 月）
写真 6（右）地面に伏せている仔ヒツジ（2024 年 6 月）

写真 7 去勢の時に取り出した睾丸
（2024 年 6 月）

5.2 毛刈り、毛梳き作業に関わる事例

ヒツジとヤギの毛刈り・毛梳き作業にかかわる異常は 1 例である（表 7）。

表 7 毛刈り・毛梳き作業に関わる事例

No.	対象	症状（病名がある場合）	部位	原因	対応（呼び方がある場合）
7)	ヒツジ ヤギ	開いた傷口	腹部 背中 皮膚	毛梳き 毛刈り	天然塩を水に溶かして傷口を洗う。傷口にヨードフォアを塗る

7）開いた傷口

毎年 5 月から 6 月にかけてヤギの毛を梳く。まずは、ハサミで剛毛を切り、その後櫛で梳き取る。その際、柔毛を梳く道具の尖った部分がヤギの皮膚に刺さり傷つけてしまうことがある。ヒツジの毛刈りはヤギと違って、ハサミで刈り取る。ハサミを使った作業では、ハサミで皮膚を刈ってしまう場合がある。傷つきやすい部位は両方とも腹部と背中である。

傷つけた場合、天然塩（写真 8）を水に溶かして、塩水で傷口を洗浄する。天然塩はモン

ゴル語でコク・ダブス（kɔk dawʊs）といい、「青い塩」の意味である。また、皮膚面の傷にヨードフォア[11]を塗布して消毒することもある（写真 9,10）。

ほかに、鋭いものが刺さってできる刺し傷、切り傷、擦傷などの開いた傷口に対しても、塩水で傷を洗って洗浄する。または、ヨードフォアを塗布して消毒する。

写真 8 天然塩（2021 年 3 月）

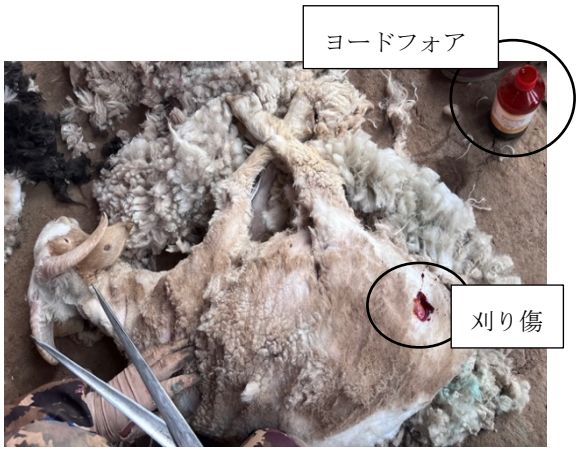


写真 9（左）ヒツジの毛を刈っている様子（2024 年 6 月）
写真 10（右）毛を刈る際に皮膚に傷つけてしまい、ヨードフォア（碘伏）」を塗布した後の様子（2024 年 6 月）

5.3 年中発生する事例

年中に発生する異常は 10 例である。軽症なものから説明していく（表 8）。

表 8 年間中に発生する事例

No.	対象	症状（病名がある場合）	部位	原因	対応（呼び方がある場合）

[11] 中国語で碘伏。

8）	ヒツジ ヤギ	食欲が失って痩せる、体力低下	毛 皮膚 耳 尻尾	ダニ	薬浴、牧地の土にはアルカリ性があったので、ヤギとヒツジを湖に追って洗う
9）	ヒツジ ヤギ	咳をする、鼻水が出る（風邪・ハニヤド *χanæ:d*）	△	他の群れと一緒に放牧した場合	アルツの葉を煎じて、その汁を飲ませる
10）	ヒツジ ヤギ	腹部が膨らみ、草を食べなくなる	腹部	消化 不良	ソーダと酢を混ぜて飲ませる
11）	ヒツジ ヤギ	声をあげて、落ち着かず、排尿姿勢をとっても排尿できない	△	不明	口をつかんで息を止めさせる。ヒツジの場合、つかむ前に天然塩を口に入れる。ヤギの場合、口をつかんで息を止めさせ後に、牧畜民が自身の歯で何度か噛む
12）	ヒツジ ヤギ	骨が折れた状態	足	放牧地での転倒、ヤギが山に登るため	折れた骨をマッサージし元の位置に整復し、小さな木や板で固定する。花椒を煮込んだ水に浸した布で骨折した足を巻いて包み、それをひもでしっかり巻いて締める
13）	ヒツジ ヤギ	餌を食べず、水も飲まず、同じ場所でぐるぐる回る（エリグゥー・オブチン *ergy: öwtʃin*）	頭部	犬のフンを食べたため	小さな丸くて白い石を持って、家のかまどの上で加熱し、熱した石を後頭部に押し当てる
14）	ヒツジ ヤギ	まつげが眼球に当たり、目ヤニが増え、涙が止まらない、目が赤くなる	目	まつげが逆さに伸びることで、まつげが眼球に当たる	天然塩を水に溶かして洗う。花椒を煮た水で洗う。目の下まぶたを軽く下に引っ張り、細い針と糸で下まぶたの皮膚と縫い留める。その後、塩水と花椒を煮た水で洗う

15）	ヒツジ ヤギ	口腔の中や口唇に赤い斑点、水泡が見られる。乳頭に発疹し、水泡が出る（アムルン *amrɒn*）	口腔 口唇 乳頭	不明	花椒を煎じ、その汁が冷めた後患部を洗う。布で患部を血が出るまで強く摩擦した後、天然塩を水に溶かして患部を洗う
16）	ヒツジ ヤギ	呼吸困難	△	草の食べすぎ	―
17）	ヒツジ ヤギ	フンが乾燥し、歩けなくなる	△	ビニール袋の誤飲	―

8）家畜の食欲が失って痩せる、体力低下

家畜の食欲が失って痩せる、体力低下など症状が出てくる。このような症状が見られる際には、家畜の体を観察し、ダニの付着を確認する。一般的に、吸血したダニは家畜の耳や尻尾に見つかることが多い。ダニが多く発生する季節は春から秋までである。出産時や毛刈り・毛梳き作業中に皮膚や毛に付着しているのを見つけることもある。

ダニは、ギレブ（*gelb*）とシャルズ（*shalzi*）の２種がある。そのうち、ギレブ（*gelb*）をハチグ（*χatfig*）とも呼んでいる。大型家畜か小家畜を問わずにでてくる。一方、シャルズ（*shalzi*）というのは、小家畜であるヒツジとヤギに付いて吸血することが多いという（写真 11）。

薬浴で退治する。B 氏によると、牧地の土にはアルカリ性があったので、ヤギとヒツジを湖に追って洗うことでダニを除去していたこともあったという。作業中にダニを見つけたら取り除いて捨てる。

人間が家畜と接触すると、衣服に付いてきて、人間の血も吸う。人間の皮膚に食い付いているダニを取ろうとして，ダニのおなかの部分を強くつまむと，口吻が皮膚の中に残る可能性がある。タバコでダニのおなかの部分を焼いたら、そうすると口吻と一緒に離れると言われていた。

写真 11 毛に付着していたシャルズ
（2024 年 5 月）

9）咳をしたり、鼻水を出したりする：風邪

咳をしたり、鼻水を出したりする症状のことをハニヤド（*χanæ:d*）という。風邪である。ハニヤド（*χanæ:d*）という名称には咳という意味もある。人間が咳をする際にも用いられる。

原因について、他の群れと一緒に放牧した時によく起こりやすいという。

対応は、アルツの葉を煎じて、その汁を飲ませると症状が緩和する。それは肺を清浄し、咳を止め、鼻を通す効用があるという。

10）腹部の膨張

ヒツジとヤギの腹部が膨らみ、草を食べなくなる。

原因は消化不良。解体した後にわかる。

対応は家にあるソーダ[12]と酢を混ぜて飲ませる。ソーダと酢は町のスーパーから購入したものである。

11）排尿困難

ヒツジやヤギが時に声をあげて、落ち着かず、排尿姿勢をとっても排尿できないことがある。

原因は明確ではない。

対応は、口をつかんで息を止めさせると排尿するというものである。ただし、ヒツジとヤギで違いが見られ、ヒツジの場合、つかむ前に天然塩を口に入れる。ヤギの場合、口をつかんで息を止めさせ後に、牧畜民が自身の歯で何度か噛む。

12）足の骨が折れた状態

骨折の原因は、放牧地での転倒などが挙げられる。特にヤギはヒツジと違って高いところを好み、山に登るため骨折することが多い。

対応は、折れた骨をマッサージし元の位置に整復し、数本の小さな木や板で固定する。そして、花椒を煮込んだ水に浸した布で骨折した足を巻いて包み、それをひもでしっかり巻いて締めると、数日で治るという。

13）餌を食べず、水も飲まず、同じ場所でぐるぐる回る

ヒツジとヤギは、餌を食べず、水も飲まず、ずっと同じ場所でぐるぐる回ることがある（写真 12）。この病気をモンゴル語で、エリグゥー・オブチン（*ergy: öwtʃin*）といい、直訳するとぐるぐる回る病気である。この状況が出た場合急死することもある。季節を問わず、発生する可能性がある。

原因は特定されていない。犬のフンを食べたからと言う人もいる。

---

[12] 重曹，重炭酸ソーダという化合物。中国語で苏打。

対応は小さな丸くて白い石を持って、家のかまどの上で加熱し、熱した石を後頭部に押し当てる。このような動作を何度も繰り返すと治ると言う。この治療法を実施する際には、経験を積んだ牧畜民に依頼する。

写真 12 エリグゥー・オブチンに罹ったヒツジ
（2024 年 6 月）

14）まつげが眼球に当たり、目ヤニが増え、涙が止まらなくなり、目が赤くなる

ヒツジとヤギの目ヤニが多くなり、涙が止まらなくなり、目が赤くなる。ひどくなると失明に至ることもあるという。

原因はまつげが逆さに伸びることで、まつげが眼球に当たり、目に入ったままになるからである。

対応は、まず天然塩を水に溶かし、あるいは花椒を煮た水で洗う。次いで、目の下まぶたを軽く下に引っ張り、家庭で使っている細い針と糸で下まぶたの皮膚と縫い留める。その後、前の洗浄に使用したのと同じ塩水と花椒を煮た水でもう一度洗浄する。数日かけて洗浄を繰り返すことで治るという。

15）口腔の中や口唇に赤い斑点、水泡が見られる。乳頭に発疹し、水泡が出る

ヒツジとヤギの口腔の中や口唇に赤い斑点、水泡が見られ、さらに乳頭に発疹し、水泡が出てくる。病気にかかったヤギは餌を食べなくなり、耳が弱々しく垂れ下がり、発熱する。こうした症状のことをモンゴル語でアムルン（*amrɵn*）という。アムルンという病名は、モンゴル語の「アム、*am*＝口」と言う語彙から派生している。口腔で発症するため、このように名付けられた。

原因は明確ではない。

現地の人によると、この病気には２つの対処法があり、ヤギとヒツジの両方に使われる。１つ目は、花椒を煎じ、その汁が冷めた後、それで患部を洗う。それを繰り返せば治る可能性がある。もう１つは、布で患部を血が出るまで強く摩擦した後、天然塩を水に溶かして患部を洗う。それを数日間繰り返せば治る可能性があると言われている。療法に使う布は家にあったもので、天然塩は店から購入したものだという。

16）呼吸困難

ヒツジとヤギが草の食べすぎが原因で突然せきこむ、あるいは呼吸困難になることがある。有効な対応はなく、発症すると死に至る。

17）フンが乾燥し、歩けなくなる

ビニール袋を食べてしまうと、ヤギとヒツジのフンが乾燥し、最悪の場合歩けなくなることがある。

死んで解体されると、胃にビニール袋が見つかる。適切な治療法はない。

5.4 感染症

感染性がある異常は 2 つである（表 9）。

表 9 感染性がある事例

No.	対象	症状（病名がある場合）	部位	原因	対処方（呼称ある場合）
18）	ヒツジ ヤギ	口、鼻、蹄、乳房に水泡が生じる、口から泡沫状のよだれが垂れる。発熱、餌を食べなくなる（シュリケェ *ʃylkæ*、アム・トゥルゥギン・オブチン *am tɵrɵ:gin öbtʃin*）	口 鼻 蹄 乳房	不明	隔離、死んだら土に埋めるか焼却
19）	ヒツジ ヤギ	毛が抜け落ち、全身の皮膚に赤い斑点、水疱が生じる。水疱が破れて傷口ができる、発熱、餌を食べなくなる（口蹄疫、ホネェン・ツォホゥル *χönen tsɔχɵr*、ゴォドロン *gɔdrɵn*）	全身 皮膚	不明	隔離、死んだら土に埋めるか焼却

18）水泡が生じて、口から泡沫状のよだれが垂れる。発熱を伴い、餌を食べなくなる。

ヒツジとヤギの口、鼻、蹄、乳房に水泡が生じて、口から泡沫状のよだれが垂れる。発熱を伴い、餌を食べなくなる。蹄に生じた水泡がひどくなると歩けなくなる。症状がさらに悪化すると死に至る。この病気は口蹄疫である。

口蹄疫をモンゴル語でシュリケェ（*ʃylkæ*）という。シュリケェとはずっとよだれが垂れるという意味である。この病気にかかった家畜のよだれが垂れていることから付けられた病名である。獣医学では、アム・トゥルゥギン・オブチン（*am tɵrɵ:gin öbtʃin*）と呼ばれ、アムは口の意味をし、トゥルゥ（*tɵrɵ:*）は蹄を意味し、後にはオブチン（*öbtʃin*）をついて、口と蹄の病気という意味になる。

病因は明確ではない。この病気に対する対処法もないという。伝染性があり、人間にも感

染する可能性があるため、感染した家畜を隔離するという。死んだら土に埋めるか焼却する。家畜が感染したらほとんどが死亡するという。

19）毛が抜け落ち、皮膚に赤い斑点、水疱が生じる

ヒツジとヤギの毛が抜け落ち、全身の皮膚に赤い斑点、水疱が生じる。症状が悪化するとさらに水疱が破れて傷口ができ、発熱を伴い、餌を食べなくなる。症状は同じであるが、現地のモンゴル人この病気をヒツジに発生した場合、ホネェン・ツォホゥル（*χönen tsɔχʊr*）と呼んでいる。ホネェはヒツジを、ツォホゥルは斑を意味する。ヒツジに発症した後の毛が抜け落ちた外見の状態から付けられた病名である。ヤギに発生した場合、ゴォドロン（*gɔdrʊn*）と呼んでいる。ゴォドロンは罵言であるという。呼び分けしている理由は不明である。

年間中発生する可能性があり、病因は明確ではない。

治療法はないため、感染した家畜を隔離するという。死んだら土に埋めるか焼却する。家畜が感染したらほとんどが死亡するという。

6.おわりに

本稿では、粛北県南山地区に暮らすモンゴル人がヒツジとヤギに生じる異常をどのような症状から見つけ、その原因をどのように考え対応しているのかについて詳述した。

ヒツジとヤギの健康状態について、牧夫は放牧に出す際、放牧中、畜舎に戻る際にヒツジとヤギの様子が普段と異なっていないかを確認する。また、牧畜作業を行う際にも健康状態を確認しており、具体的には出産期、去勢作業、毛刈り・毛梳き、搾乳期がある。

異常が発生しやすい対象は、母畜、新生児、仔畜である。

異常の症状には、出産に伴う異常、外傷、身体部位の異常、姿勢・歩様の異常、皮膚・被毛の異常、呼吸の異常、体温の異常、採食・行動の異常、排尿排便、フンの異常がある。

異常を確認方法としては、外見上の目視による観察に加え、手で触れて確かめることがある。また、死亡した家畜を解体することで原因をわかる場合もある。

ヒツジとヤギの異常は全 19 例、すべて両方に共通する。そのうち、異常の症状は同じだが対応に違いが見られる事例は 11）の 1 例である。症状と対応は同じだが病名が異なる事例は 19）の 1 例である。

異常が発生する原因について栄養不足、消化不良、畜舎の衛生状態、エネレギー不足、季節の寒さ、牧畜作業に伴う傷口の回復、ダニ付着、転倒、ビニール袋の誤飲、逆さまつげ、食べ過ぎなどが挙げられる。6 例は原因不明であり、そのうち 2 例は感染症である。特定されていないのは 13）の 1 例である。

ヒツジとヤギの異常に対する民間治療には、洗浄 4 例と体を温める 3 例、外科処置 3 例、外用薬の塗布 2 例とマッサージ 2 例がある。感染症は 2 例確認で、いずれも不治の病とされ、感染の広大を防ぐために、隔離する、埋め、焼却などの対応が取られる。

上記の民間治療に使用されている材料はさまざまで（表４）、家にあるもの、購入品、牧

地や自然から採取、畜産物など身近なものを利用している（表 4)。

粛北県南山地区で収集したヒツジとヤギの事例を見ると、牧畜民の家畜に対する民間治療は、「日々家畜をこまかく観察する遊牧生活のなかでの蓄積」（楊 2002：358）である。治療法も、日常的に牧畜民自ら行ってきた方法であり、治療に使用されている材料も、日常的に入手しやすく、自ら使用しているものである。

謝辞

本稿のフィールド調査を行う際にご協力くださった皆様、助けてくださった皆様に心より感謝申し上げます。調査研究をいつも丁寧にご指導くださっている児玉香菜子先生に、深く御礼申し上げます。また、経済的にご支援していただき、お世話になっている国際ロータリー米山記念奨学会に感謝の意を表します。

引用文献

【日本語】

バヤリタ

(2018)「オイラト・モンゴル人の野生植物の利用文化—中国新疆ウイグル自治区イリ・カザフ自治州テケス県を中心に」千葉大学人文社会科学研究科博士論文

バヤリタ・ブリガ

（2009）「オイラトモンゴル語の世界」『日本語の隣人たち』白水社, 52-71

太田至

（1991）「トゥルカナの家畜をめぐる病気観」　『ヒトの自然史』平凡社, 295–321

楊海英

（2002）「モンゴルにおける家畜の病気治療観に関する一資料–馬病治療の写本を中心に–」『北アジアにおける人と動物のあいだ』東方書店, 327-364

シンジルト

（2021）『オイラトの民俗誌－内陸アジア牧畜社会におけるエコロジーとエスニシティ』明石書店

星泉・海老原志穂・南太加・別所裕介編

（2020）　『チベット牧畜文化辞書』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

松原正毅

（2004）『遊牧の世界—トルコ系遊牧民ユルックの民俗誌から』平凡社

【中国語】

宝鲁尔

（2014）「肃北蒙古族定居牧民社会变迁研究」蘭州大学修士論文

肃北蒙古族自治县地方史志办公室编

（2023)『肃北年鉴』甘肃民族出版社
云红琦主编
（2000)『肃北蒙古族自治县畜牧业志』 甘肃人民出版社

【英語】
Hefernan, Claire
1997. Tibetan veterinary medicine. *Nomadic Peoples* 1(2): 37-54.

【URL】
GKZ 植物事典（最終閲覧日 2025 年 2 月 25 日）
https://gkzplant.sakura.ne.jp/index.html
富山大学・民族薬物データベース（最終閲覧日 2025 年 2 月 25 日）
https://ethmed.toyama-wakan.net/Search/